

児島湖流域下水道の概要

児島湖は、昭和34年に児島湾の一部を締め切って造られた人工湖であり、昭和40年代に入り、湖の背後地の都市化が進み生活排水及び産業排水が増加した結果、水質が急激に悪化した。

児島湖流域における下水道計画については、立ち後れた地域の下水道整備を効率的、一体的に行い、生活環境の改善と児島湖の水質保全を図るため、流域下水道方式を採用し、放流先が児島湖であることから、事業当初から、窒素、リンの削減を含めた高度処理方式を取り入れることとした。

工事着工年度：昭和57年度

供用開始年月：平成元年 3 月（岡山市、玉野市）

供用開始年月：平成 3 年 3 月（倉敷市、早島町）

計 画 区 域：岡山市、倉敷市及び玉野市の各一部、早島町の全域

排 除 方 式：分流式

処 理 方 法：凝集剤添加、三段硝化脱窒法及び急速ろ過

敷 地 面 積：53.4ha

■計画の概要

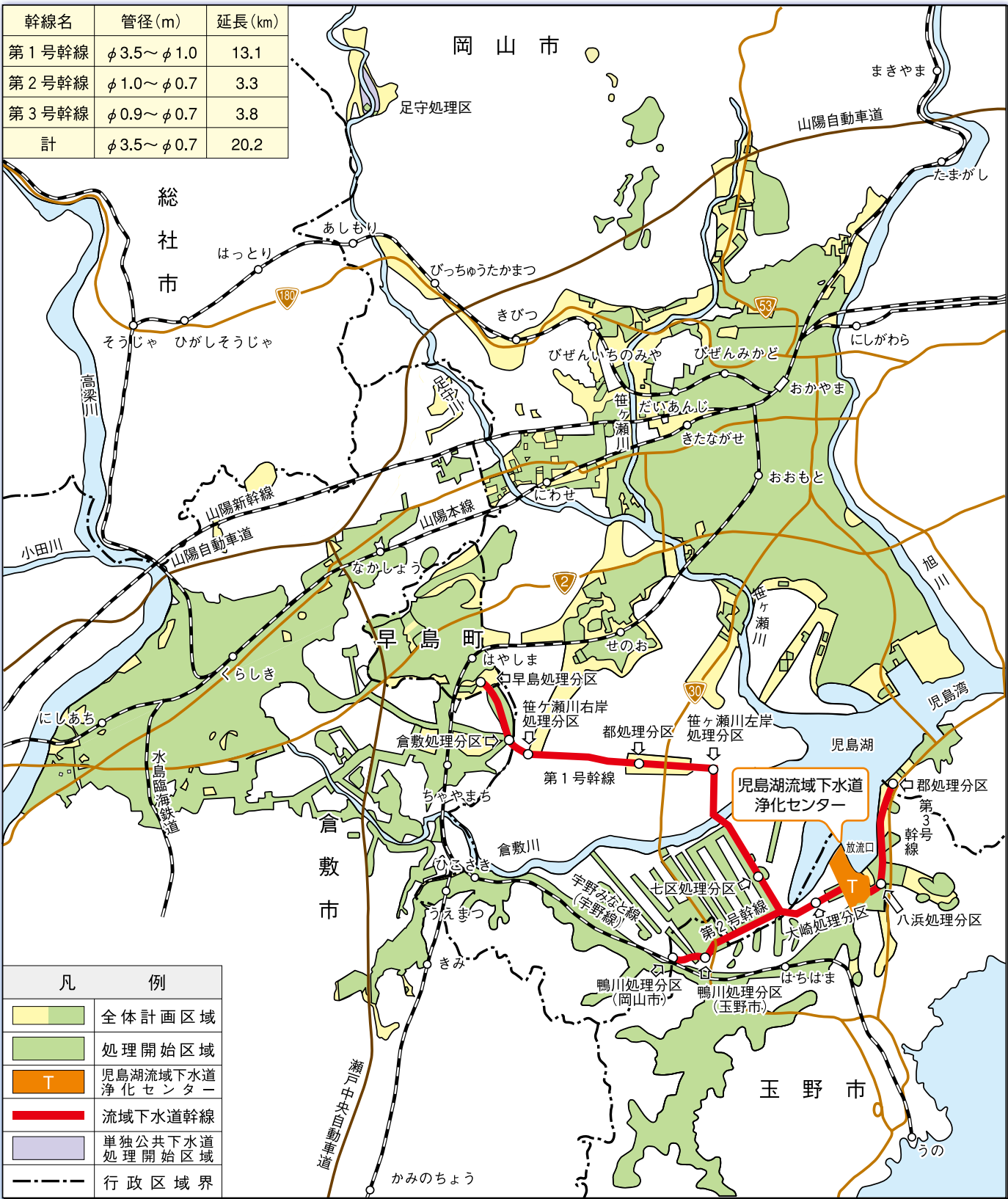
項 目	全体計画	事業計画	令和 7 年 3 月末
処 理 面 積 (ha)	12,603	11,833	9,823
処 理 人 口 (人)	585,200	584,400	544,000
処 理 能 力 (㎡/日最大)	346,700	346,700	295,300
幹 線 管 渠 (km)	20.2	20.2	20.2

■主要施設、設備の概要

名称	構造・能力	全体計画	事業計画	令和 7 年 3 月末
ポンプ設備	汚水ポンプ	7㎡/分	2 台	2 台
		15㎡/分	3 台	3 台
		70㎡/分	2 台	2 台
		150㎡/分	2 台	2 台
		31㎡/分	2 台	—
沈砂池	幅3.90m×長18.0m	4 池	4 池	—
	幅2.00m×長7.0m	2 池	2 池	—
	幅3.45m×長27.0m×深3.0m	2 池	2 池	2 池
	幅7.20m×長27.0m×深3.0m	11 池	11 池	11 池
最初沈殿池	幅6.80m×長19.5m×深3.0m	36 池	36 池	24 池
	幅4.70m×長19.5m×深3.0m	8 池	8 池	—
	幅7.10m×長102.8m×深6.5m	12 池	12 池	12 池
	幅21.10m×長101.4m×深6.5m	12 池	12 池	11 池
	幅9.00m×長94.0m×深6.5m	4 池	4 池	—
最終沈殿池	幅3.45m×長47.0m×深3.5m	2 池	2 池	2 池
	幅7.20m×長47.0m×深3.0m	11 池	11 池	11 池
	幅6.80m×長54.0m×深3.5m	36 池	36 池	33 池
	幅4.70m×長47.0m×深3.5m	8 池	8 池	—
		36 池	36 池	34 池
急速ろ過池	36㎡/池	4 池	4 池	—
	30㎡/池	5 棟	5 棟	4 棟
消毒室	次亜塩素酸ソーダ	5 池	5 池	4 池
汚泥濃縮設備	重力式	8 台	8 台	5 台
	機械式	4 基	4 基	—
汚泥消化タンク	8,000㎡/基	1 基	1 基	—
	3,400㎡/基	10 台	10 台	7 台
	スクリーンプレス	—	2 台	2 台
汚泥脱水設備 送風設備	送風機	1 台	—	—
		110㎡/分	3 台	3 台
		180㎡/分	2 台	2 台
		360㎡/分	5 台	3 台
		150㎡/分	1 棟	1 棟
管理棟	鉄筋コンクリート造 地上 2 階	1 棟	1 棟	1 棟
電気棟	鉄筋コンクリート造 地上 2 階 地下 1 階	1 棟	1 棟	1 棟

児島湖流域下水道事業区域図

(令和7年3月末)

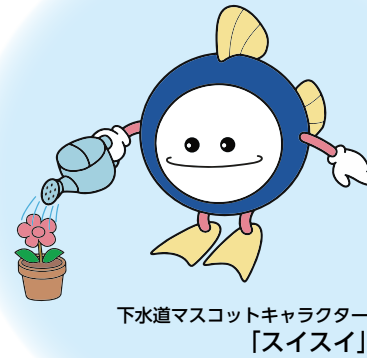


岡山県土木部都市局都市計画課
岡山県備前県民局建設部児島湖流域浄水班
(公財) 岡 山 県 下 水 道 公 社

〒700-8570
〒706-0226
〒706-0226

岡山市北区内山下2-4-6
玉 野 市 東 七 区 4 5 3
玉 野 市 東 七 区 4 5 3

☎(086) 226-7498
☎(0863) 51-1198
☎(0863) 51-1955



下水道マスコットキャラクター
「スイスイ」

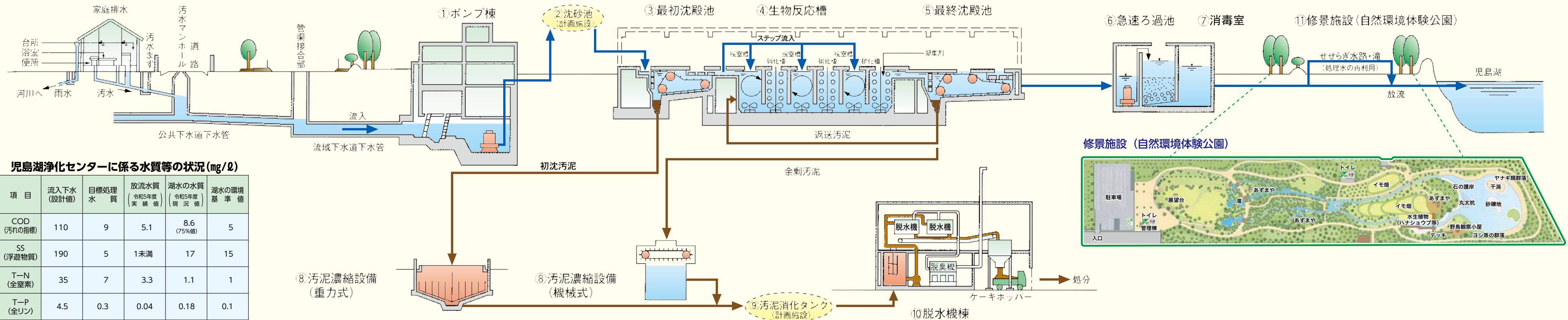
児島湖流域下水道

2025



岡山県・児島湖流域下水道事業協議会

浄化センターのしくみ



- ①ポンプ棟

ゴミなどをスクリーンで取り除いた後、下水をポンプで処理施設へ送ります。
- ②沈砂池

土砂類を沈めて沈砂除去設備によって取り除きます。
- ③最初沈殿池

下水を約2時間ほどかけてゆるやかに流します。この間に沈殿しやすいドロなどの固形物の大部分を沈殿させ、かき寄せて汚泥濃縮設備に送ります。
- ④生物反応槽

下水に活性汚泥 (微生物を多量に含んだドロ) を加え、約17時間かけてかきまぜたり、空気を加えたりします。この間に微生物は汚れを食べて分解し、ふわふわした綿毛状になって沈殿しやすくなります。当浄化センターの生物反応槽では一般に行われている有機物の分解の他に窒素やリンも取り除ける方法を用いています。
- ⑤最終沈殿池

綿毛状になった活性汚泥は約4時間で池の底に沈み、きれいな上澄みの水は急速ろ過池に、活性汚泥は生物反応槽へ返送汚泥として、又、余分の汚泥は、汚泥濃縮設備へ送ります。
- ⑥急速ろ過池

砂の層を通すことによってより高度に浮遊物を取り除きます。
- ⑦消毒室

急速ろ過池で処理されたる過水に塩素剤を注入し、放流管内で消毒します。
- ⑧汚泥濃縮設備

最初沈殿池や最終沈殿池の汚泥は多くの水分を含んでいるので、ここで水分を減らして汚泥を濃縮します。最初沈殿池の汚泥は重力式で、最終沈殿池の汚泥は機械式で濃縮します。
- ⑨汚泥消化タンク

濃縮タンクで濃縮された汚泥は、このタンクに送り込まれ、加温しながらかき混ぜ、微生物の働きにより有機物を分解させ安定なものにします。
- ⑩脱水機棟

汚泥の水分をさらに減らし取り扱いのし易いものにして場外搬出処分とします。
- ⑪修景施設 (自然環境体験公園)

急速ろ過池で処理した水の一部を配管で分岐させ、さらに減菌処理した後、公園内へ流入させています。

浄化センター配置図

